

枠と粒子

石橋志郎

Frame / Particle ISHIBASHI Shiro

日本画の解像度

日本画は、「枠と粒子」でできている。枠とは、絵画のフレームだけではなく、伝統や道具、技法、画材など、さまざまな「枠」がある。一方、粒子とは、日本画材に用いる岩絵具や胡粉の粉末であり、画面に反射する光も想起するだろう。

石橋志郎はこれまで、日本画顔料の粒子がもつ物質感に着目し、絵具を幾層も塗り重ねることで、光を内包するような絵画空間を探究してきた。雪や雲のように浮遊する白いかたちは、さまざまな連想や思考へと誘い、眼差しは画面をたゆたう。本展では粗さの異なる岩絵具が用いられる。一方、念紙で下絵を転写した線をわずかに残し、白い色面にはその輪郭を意識させるトリムマークのような仕掛けを加えるという。かたちを捉える線、かたちを規定する枠、粒子の集積から立ち現れるかたち。「枠と粒子」は互いの境界を重ね合わせながら、日本画を成り立たせる枠組みを問い直す。

では、なぜ石橋はこれほど「粒子」にこだわるのだろうか。その理由として、日本画制作における微細なディテールの選択がある。日本画の絵具は、岩絵具や胡粉などの微細な「粒子」からなる。岩絵具には粒の粗さによって複数の番手(種類)があり、同じ顔料でも粒の粗細や水、膠の量、塗り重ね、乾燥によってその発色や質感、光の反射は変化する。つまり、日本画では、画家は色を選ぶだけでなく、粒度をも選んでいるのだ。日本画の画面は、無数の粒子の集積としてできている。

だが、すべての日本画の画面がそのような選択と工程を経るわけではない。石橋の絵画には、緻密な下絵の作成から幾層にも絵具を重ねていくまで、細かな判断を要する工程が多くある。その微細な観察と選択の積み重ねが、画面の解像度を高めていく。悩ましいのは、その「枠と粒子」に込められた広大な情報量が、作品を前にして初めて見えてくることだ。

平田剛志(美術批評)

石橋志郎

枠と粒子



11月4日(水) - 14日(土)

PM 12 - 7 (最終日 ~ PM 5) 休廊 日・月・火

ISHIBASHI Shiro

Frame / Particle

日本画の材料は、私にとって未だに難解である。

絵具は独自の特性を持っていて、こちらの思うようには動いてくれない。腕力でねじ伏せて絵具を支配するやり方もあるのだろうけれど、できればいきいきと絵具が輝いてくれるような関わり方をしていきたいと思う。

扱いにくさという制限の「枠」の中でこそ生まれる、本当の自由な表現とは何か。制限があってこそ、工夫が生まれ、その工夫からあたらしい素材の扱いと独自の表現が生まれていく。素材の制限の「枠」と、現代へとつづく文化の「枠」、自己の性質の「枠」という、三つの「枠」の交わるところに、きっとあたらしいビジョンが浮かび上がってくる。展開は容易ではないけれど、追求していきたいと思う。

1981 大阪府豊中市出身

2005 京都市立芸術大学美術学部日本画専攻卒業

2007 同大学大学院修士課程美術研究科絵画専攻修了

個展

2026 「Vision」 藍画廊(東京)

2024 「Around the light」 高島屋大阪Next、高島屋京都

2023 「Silence」 +Iart(大阪)

2023 「Floating」 カホ・ギャラリー(京都)

2022 「Atmosphere」 ギャラリーあしやシュレ(兵庫)

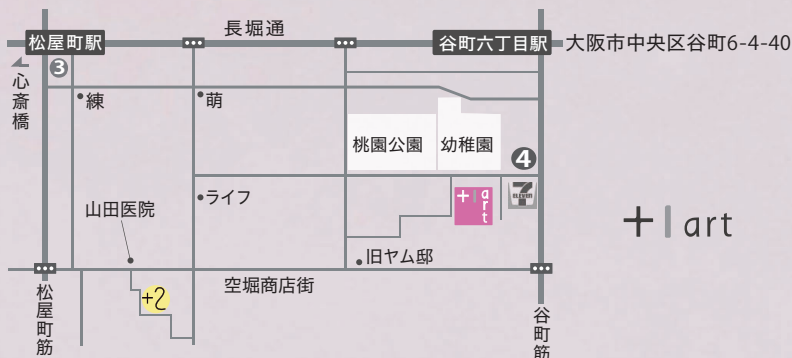
受賞歴

2021 令和3年度京都市芸術新人賞

2021 「京都日本画新展2021」大賞



TEL 06-7712-6685 谷町六丁目駅④徒歩1分 出口右手の石段を下り小路を左に



+Iart